発表者　　山本　智子
テーマ　　「一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方について」

どうぞよろしくお願い申し上げます。山本です。

今、学校では部活動の地域移行が進んでいます。私の１つ目の課題は、部活動の地域移行を通して、地域共生社会をこの中野でさらに推進できないかということです。

そのことを考えたきっかけが、２０２２年度に、東京都のＡ市で、吹奏楽部の顧問の先生方に、「部活動の地域移行が進むことに何か問題はありますか」とお尋ねする機会があったことです。その際に、学校の先生方のご負担が減るし、子どもたちが専門的な教育を受けられるといったいい面がある一方、懸念点も幾つか伺いました。その中に、多様な子どもたちに関わることが含まれていました。例えば、その地域の講師の方が、学校の先生が担ってくださっているような多様な子どもの理解ができるだろうかといったことです。また、気になりましたこととして、今、中学校では、部活があるから学校に通えている子どもたちが少なからずいて、部活動が学校からなくなり、いわゆるお勉強が中心になると、ますます不登校が増えるのではないかという懸念がありました。加えて、特に音楽関係では、負担する費用が上がったり、送迎等の負担が増えたりすると、それを担えない家庭の子どもたちが、部活では親しめていた音楽活動をできなくなったり、諦めたりしてしまうのではないかといったご懸念もありました。

そこで、調べてみたところ、全国的には、地域ごとにいろいろな動向がありました。まず、複数の学校間で連携している例として、学校や教員の関与を残し、公教育の利点を生かすとともに、先生方のご負担を減らして、学校間の連携を中心に進めている地域があります。また、音楽などを活用し自治体の付加価値を高めようと、音楽や芸術を通した豊かなまちづくりを進める例があります。さらに、自治体を中心とし、学校を含む新たな地域の連携によって取り組んでいる例があります。経済的負担などが課題になる多様な子どもに影響を与える問題を減らすために学校を包摂する例では、子どもが参加するといった実践もみられます。

このようなことをふまえ、私の住む中野の現状がどうなっているのか、学校や地域の方針、動向がどうなっているのか、そして、この中野に特有の、あるいは全国に共通するような課題はないだろうかといった問いを持つようになり、子どもや学校、地域に関わる課題、それに関わる方策、支援などについて考えるために、課題１に取り組みたいと思っております。

さらに、関係する課題として、多様な子どもの地域における社会活動の支援に取り組めないかと考えています。今、不登校の子どもや、経済的な課題

がある子どものお話が出てきましたが、２０２２年の国連障害者権利条約の委員会の勧告で、日本は病気、障害などのある子どもたちの分離教育の問題が挙げられていますことから、部活動を学校から地域に移行するという、学校の枠を超えた新たな活動をチャンスと考え、病気、障害のある子どもや、外国にルーツのある子どもなど、多様な子どもたちを地域において包摂し、ともに活動する中で育ち合うことができるような制度、実践を推進できないか。そのための現状、課題、実現のための条件はどこにあるのか。また、いろいろな自治体、中野にも活用できるグッドプラクティスもあると思いますので、そういったことも調査をしたり、検討したりしたいと考えております。また、今はオンラインも活用できますので、在宅や施設で育っている子どもたちも包摂した学びや育ちの場、そのような支援に取り組むまちとして中野を発展させていければと思っております。

さらに、区立学校では心理的支援が進められておりますが、多様な子どもたちが学校に通っておりますことから、福祉的支援も重要になってきているように思われます。この２０２４年から、子ども家庭センターが制度的に制定されるなど、多様な地域資源が整備されつつありますが、こういった福祉に関わる専門職、専門機関といった地域の資源を学校とつなげていく中で、より多様な子ども支援、学校教育支援に関わることができないのかというところも課題としてあります。福祉的支援に早期からつなげることができますように、小学校中心に、区立学校の福祉的支援の実態やニーズはどういうところにあるのか、今後の連携・協働に期待されるような支援のあり方にはどのようなものが考えられるか、そのための制度や実践に関わる条件、あるいはそれを発展させていく可能性というのはどういうところにあるのか。そのようなことを検討できればと考えております。

本日はどうもありがとうございました。

区　　長　　ありがとうございます。こういう感じのプレゼンの中身のことを、中野の場合でどうなのかというのを研究されたいというお話だったと理解していますけれども、一番気になったのは分離教育のところのお話なのですけれども、多分、これを地域移行でうまくインクルーシブなことができないかという話でしたよね。違いますか。

山　　本　　学校教育の制度の問題があり、国の関わりや、文部科学省の見解等もあって、それらに早急に対応することは難しいかもしれませんが、部活動の地域移行というのは、学校教育の制度を超えた活動になりますので、地域の中で多様な子どもたちがともに活動

する機会を実践面から発展させる新たなチャンスと捉えて、多様な子どもたちがともに学び育つ実践から始めることを、この中野でさらに先進的に取り組んでいけるのではないか、そんなまちでありたいと住民として思っております。

区　　長　　それで最初のところとの関連でちょっと気になったのが、多様な子どもの理解を、地域移行の中でどうやってやっていくのだと。指導者というのはそういうのの専門家でも何でもないので。それを同じように地域移行の中でどう学ぶのですかというところの、どうクリアするかというのがちょっと分からなかったのですけれども。

山　　本　　地域によっていろいろ考え方があり、学校の先生方の意向も踏まえながら、学校を含めた地域連携として進めているところでは、多様な子どもの支援という観点を重視されているように思われます。子どもたちのことをよくご存じでいらっしゃる先生方や学校と一緒に問題に対応されている自治体もあるようですので、参考にさせていただきたいと思っています。

区　　長　　あと、部活動のために学校に行っている子どもというのがいる。これはどうクリアすればいいのですかね。

山　　本　　学校に通いやすくしたり、子どもの課題に応じて、心理的や福祉的な支援などを整えたりすることを大事にする一方で、学校以外にもいろいろな活動の場を持てることを通して、子どもの学びや育ちを支援できればと考えます。地域において、多様な経験をすることで子どもも変わっていき、周りも変わっていくことができる貴重な機会になればと思います。

区　　長　　子どもが学校の先生と自分の家の親だけではなくて、いろんな大人と関わることが必要だということですよね。

山　　本　　大学などとの連携を通した、お兄さん、お姉さんとの、斜めのようなつながりも大事ではないかと思います。